

# 児童養護施設版「生活安全感・安心感尺度」 活用の可能性の評価研究

マツムラ カオリ    スズキ ヒロシ    ウツキ    タカマサ    オカ    タカシ  
松村 香\*1    鈴木 寛\*2    宇津木 孝正\*3    岡 隆\*4

**目的** 児童養護施設の入所児童の約6割は被虐待児童であることから、その養育には困難が伴い、状況によっては、施設内において人権侵害問題に発展する場合がある。そのため、施設内で子どもが安全で安心して生活できることは重要な課題である。施設内で子どもが感じる安全感・安心感の向上のために、松村らは児童養護施設版「生活安全感・安心感尺度」(Scale of Children's Sense of Safety and Security: 以下、SCSSS)を開発している。本研究では、その尺度を児童養護施設で活用することが、子どもの安全感・安心感の向上のために有効であるか評価することを目的とした。

**方法** 2015~2017年の間に毎年1回、合計3回児童養護施設に暮らす子どもを対象に、SCSSSの効果の評価するために、SCSSSを使った調査を実施した。3回とも調査を実施できたのは神奈川県、埼玉県にある5施設であった。そのうち調査の条件が異なる2施設を除外した3施設に入所中の子ども(有効回答 調査1回目:154名, 調査2回目160名, 調査3回目:158名)を対象に、SCSSSの生活安全感・生活安心感得点の経年的推移から、SCSSSを活用した介入の有効性を検討した。

**結果** 生活安全感得点は、調査3回目が調査1回目に比し、有意に上昇するなど( $P < 0.01$ )、子どもが感じる施設内での安全感は高まった。一方、生活安心感得点には、調査3回目は調査1回目に比し得点の伸びは認められたものの、両者間で有意差は認められなかった。また、SCSSSを使った調査に関して約7割の子どもが有効性を感じ、調査の継続性も望んでいた。また、自由記述の中には、安全感・安心感に関して、子どもの意識が向上していることを示す記述があった。

**結論** SCSSSを使った調査による介入は、児童養護施設で暮らす子どもが感じる安全感・安心感の向上ならびに安全感・安心感に対する子どもの意識の変化に有効であることが示唆された。

**キーワード** 児童養護施設, 生活安全感・安心感尺度, 介入, 評価研究

## I 緒 言

2013年2月1日現在、児童養護施設に入所している子どもの中で、被虐待児童が59.5%、何らかの障害を持つ子どもが28.5%と年々増加傾向にある<sup>1)</sup>。そのため、子どもの養育には困難

を伴い、施設内において体罰などの人権侵害問題に発展する場合がある<sup>2)-4)</sup>。2009年児童福祉法改正により、施設職員等による被措置児童等の虐待について、その状況を都道府県知事等が、公表する制度等が法制化されるなど<sup>5)6)</sup>、子どもの人権が守られるシステム作りは重要な課題

\* 1 国際医療福祉大学小田原保健医療学部講師    \* 2 川崎市児童養護施設新日本学園理事長    \* 3 同心理士

\* 4 日本大学文理学部心理学科教授

となっている。

このシステム作りのためには、まず、施設内で暮らす子どもの安全感や安心感の実態を把握することが必要である。松村らは、その実態把握のために、子どもが、児童養護施設内で安全で安心して生活できているかアセスメントするツールを開発している<sup>7)</sup>。具体的には、彼らは、生活安全感を、「他者（他の子ども・大人）から身体的・心理的・ネグレクトなどの人権侵害を受けずに、自己の心身の安全が守られる状態」、生活安心感を「他者（他の子ども・大人）から心理的受容・承認を得て、居心地よく、安心して生活できる状態」と定義して、それらを測定するために、児童養護施設版「生活安全感・安心感尺度」(Scale of Children's Sense of Safety and Security：以下、SCSSS)を開発している<sup>8)</sup>。さらに、この尺度の妥当性を検討するために、抑うつ状態と自尊感情得点で測定される「精神的健康感」を潜在変数（抑うつ状態が低く、自尊感情が高い場合を「精神的健康感」が高いことを表す潜在変数）として導入し、SCSSS得点が高くなればなるほど、「精神的健康感」も高くなることを明らかにしている。本研究では、このSCSSS尺度を現場に活用することによって、子どもへの安全感や安心感がどのように影響を受けるか検討することを目的とする。

一般的に尺度を実施するということは、尺度が扱っている問題への啓蒙効果があるといわれている。つまり、調査や実験などの対象者になると、その対象者の中で、調査や実験の内容が鋭敏化することが知られている<sup>9)10)</sup>。鋭敏化とは、研究終了後、研究の中で体験した調査や実験内容が記憶や意識に上り、その内容に注意が向き、それに関連する反応が多くなり、また強くなることである。この鋭敏化は、評価懸念や欲求特性を伴うことによって、対象者に社会的に望ましい反応を促進させることがある。そのため、このSCSSSを使った調査を反復的に繰り返すことによって、現在どういう問題があるのかについて、子どもは意識を高めていき、日常生活でこの安全感・安心感への気付きや発見を

得るという学習効果が生まれると考えられる。

そこで、以下のような仮説を立て、子どもが感じる安全感・安心感の経年的変化ならびに安全感・安心感に対する子どもの意識の変化を追うことにより、SCSSSの活用の効果を評価することを目的とする。

(仮説)

SCSSSを活用した調査を繰り返すことによって、子どもの生活安全感・安心感得点が向上するとともに、安全感・安心感に対する子どもの意識が高まる。

## Ⅱ 研究方法

### (1) 対象

2015～2017年の間に毎年1回、合計3回児童養護施設に暮らす子どもを対象に、SCSSSの効果を評価するために、SCSSSを使った調査を実施し、SCSSS得点の経年的変化を追跡した。3回連続して調査ができた施設は、神奈川県、埼玉県にある5施設であった。この5施設のうち結果に大きな影響を及ぼすと考えられる2施設は解析の対象から除外した。その理由は、1施設は、職員数の不足により2棟に別々に住んでいた子どもを1つの棟に集めて生活するなど、環境に大きな変化があり、結果に影響を及ぼしている可能性が考えられたからである。別の1施設は、アンケートの実施を中立的な研究者や施設内心理士ではなく、直接子どもを養育している職員が実施するなど、アンケートの実施方法が実施マニュアルと異なり、結果に影響を及ぼすと考えられたためである。

子どものデータは、欠損値が3個以下のものは、当人の尺度の平均値を挿入した。それぞれの調査回数（調査年度）と調査数ならびに有効回答数を表1にまとめた。

調査1回目は、158名から回答を得、そのうち有効回答数は154名（有効回答率97.5%）であった。調査2回目は、161名から回答を得、そのうち有効回答数は160名（有効回答率99.4%）であった。調査3回目は、160名から回答を得、そのうち有効回答数は158名（有効

回答率98.8%)であった。ちなみに、子どもは、毎年入退所があるため調査回ごとに対象者の一部は入れ替わりがあるため総人数も変化がみられた。

また、調査1回目は、SCSSSの尺度開発が目的であったため、調査は匿名で行い<sup>8)</sup>、調査2・3回目は、個々の子どもの得点の推移を追跡するために、連結匿名で調査を実施した。個々の子どもの変化を追跡できた有効回答数は142名であった。

なお、小学1年生に関しては、小学2年生にあがる2～3カ月前の児童で、質問紙の内容を理解できる子どもを対象とした。

## (2) 調査方法ならびに調査期間

児童養護施設長の同意の下、施設に入所中の子どもを対象に、研究者もしくは施設内心理士が質問紙調査を実施した。調査対象の3施設中2施設は、研究者が直接子どもに調査の説明や質問紙の配布を行い、子どもが回答した後、質問紙を封筒に入れ封印してもらったものを回収した。残り1施設は、子どもが安心して回答ができるよう、施設内で中立的な立場の臨床心理士が調査を実施し、調査後郵送してもらう方法で行った。調査1回目は匿名、調査2・3回目は連結匿名で実施した。調査期間は、調査1回目は2015年1～4月、調査2回目は2016年1～4月、調査3回目は2017年1～4月であった。また、調査終了後は施設の管理者に結果報告を行った。

## (3) 調査内容

調査1・2回目は、以下の1) 2) 4)、調査3回目は3)を追加し、1)～4)を調査した。

### 1) 基本属性

性別、年齢、学年、入所年齢、入所期間、被虐待経験の有無。ただし、被虐待経験の有無に関しては、子ども本人からではなく、別途、職員より虐待を受けた子どもの情報を得た。

### 2) 児童養護施設版「生活安全感・安心感尺度」(SCSSS)<sup>8)</sup>

この尺度は、A.H.マズローの5段階欲求説

表1 調査回数(調査年度)と調査数ならびに有効回答数

	有効回答(調査数)		
	調査1回目 (2015年調査)	調査2回目 (2016年調査)	調査3回目 (2017年調査)
合計	154(158)	160(161)	158(160)
A	52( 52)	52( 53)	58( 58)
B	58( 61)	63( 63)	56( 56)
C	44( 45)	45( 45)	44( 46)

を理論的根拠に<sup>11)</sup>、生活安全感と生活安心感の2つの尺度から構成されている。マズローは、第1の欲求(生理的な欲求)が満たされると第2の欲求(安全の欲求)が生じ、これも満たされると第3の欲求(所属・愛情の欲求)、第4の欲求(承認・自尊の欲求)、第5の欲求(自己実現の欲求)へと進むが、上位の欲求は下位の欲求が満たされてはじめて生じると論じている。

松村らは児童養護施設で暮らす子どもが、上位の自己実現の欲求に向かうためには、まずは安全感(第2の欲求)ならびに安心感(第3・4の欲求)が満たされているかをアセスメントすることが必要と考え開発した尺度である<sup>8)</sup>。

生活安全感は21項目から構成され、例えば「施設内の他の児童(あるいは職員)から、なぐる・けるなどの暴力を振るわれることがありますか」「施設内の他の児童(あるいは職員)から、嫌なことを言われたり、バカにされたりするようなことがありますか」「施設内の他の児童(あるいは職員)から、無視されるようなことがありますか」など、他の子どもや職員に対する安全感に関してアセスメントする内容となっている。「よくある」0点、「ときどきある」1点、「ほとんどない」2点、「まったくない」3点の4件法で測定し得点化してある。合計得点は0-63点の範囲で、合計点が高ければ高いほど「安全な状態」であるとしている。

生活安心感も生活安全感同様21項目から構成され、例えば「施設の中に、自分の素直な気持ちや困ったことを話せる児童(あるいは職員)がいますか」「施設の中に、自分を認めてくれる児童(あるいは職員)がいますか」「施設内の他の児童(あるいは職員)の中で、あなたの

気持ちをわかってくれる人がいますか」など、主に相手から受容・共感を受け安心感が得られているかをアセスメントする内容となっている。安心感の低いものを0点、高いものを3点の4件法で測定し得点化し、合計得点は0-63点の範囲で、合計点が高ければ高いほど「安心な状態」であるとしている。

3) SCSSS活用に関する子どもの意見調査  
設問1「この1年間をふりかえって、このアンケートは、みなさんが、施設の中で安全で安心して生活できることに役立ったと感じましたか」、設問2「このアンケートを続けることで、みなさんが、施設の中で、安全で安心して生活できることに役立つと思いますか」の2問をアンケートの最後に付け加え、尺度活用の効果について、子どもに直接質問した。

4) SCSSS活用に関する子どもの自由記述  
アンケートの最後に、感想など自由に記述してもらった。

#### (4) 分析方法

3施設のSCSSS得点を、生活安全感と生活安心感に分けて経年的変化を検討した。まず初めに、3施設(A, B, C)の施設ごとならびに

3施設全体の平均値の経年的変化を比較するために一元配置分散分析を行い、有意差が認められた場合にはTukeyの多重比較を行った。次に、調査2回目と調査3回目は連結匿名で実施したために、個人における変化を追跡できることから、連結匿名の有効回答者142名を対象に、対応のあるt検定を行った。有意水準は5%とした。分析には、統計ソフトSPSS Ver 22.0を用いた。

自由記述では、KJ法を参考しながら、心理士2人で分類を行った。意味のまとまりを1つの記述とみなし、その記述をカテゴリーに分け、各カテゴリーの出現頻度と出現率を算出した。

#### (5) 倫理的配慮

調査実施にあたっては、研究の目的、参加の自由、途中中断の権利、不利益からの保護、プライバシーの保護について説明した後、承諾の得られた子どもに実施した。また、本研究は、国際医療福祉大学の倫理委員会の承認(承認番号 調査1回目14-Io-105, 調査2・3回目調査15-Io-102)を得た(承認年月日 調査1回目:2014.2.29 調査2・3回目:2016.2.5)。

### Ⅲ 結 果

#### (1) 対象の基本属性(表2)

3回の調査の基本属性の傾向は、性別は女性が多少多いもののほぼ半々だった。子どもの年齢構成は、中高生が調査1回目52.6%、調査2回目56.9%、調査3回目60.8%と、小学生よりやや多くかつ年々増加傾向であった。入所年齢は、小学入学前が約6割強、入所期間は、5年以上が調査1回目68.8%、調査2回目71.2%、調査3回目70.9%と長期入所の子どもが多かった。虐待の有無では、被虐待児童は調査1回目59.1%、調査2回目70.0%、調査3回目70.9%と年々増加傾向であった。

表2 対象の基本属性(3施設)

	調査1回目 (2015年調査) (N=154)		調査2回目 (2016年調査) (N=160)		調査3回目 (2017年調査) (N=158)	
	人数	%	人数	%	人数	%
児童の性別						
男	73	47.4	76	47.5	77	48.7
女	81	52.6	84	52.5	81	51.3
児童の年齢						
小学生(6~12歳)	73	47.4	69	43.1	62	39.2
中学生(13~15歳)	47	30.5	56	35.0	54	34.2
高校生(16~18歳)	34	22.1	35	21.9	42	26.6
入所年齢						
3歳未満	50	32.5	56	35.0	50	31.6
3歳以上~6歳未満	49	31.8	49	30.6	53	33.5
6歳以上~12歳未満	36	23.4	36	22.5	39	24.7
12歳以上	19	12.3	19	11.9	16	10.1
入所期間						
1年未満	5	3.2	3	1.9	5	3.2
1年以上~5年未満	43	27.9	43	26.9	41	25.9
5年以上~10年未満	53	34.4	53	33.1	46	29.1
10年以上	53	34.4	61	38.1	66	41.8
被虐待経験の有無						
あり	91	59.1	112	70.0	112	70.9
なし	63	40.9	48	30.0	46	29.1

表3-a 3施設の生活安全感得点の経年的変化

	調査1回目	調査2回目	調査3回目
A	46.17	48.57	48.15
B	44.72	46.78	52.07
C	42.00	45.24	45.97
3施設平均値	44.44	46.93	48.93

図1-a 3施設全体の生活安全感平均値の経年的変化

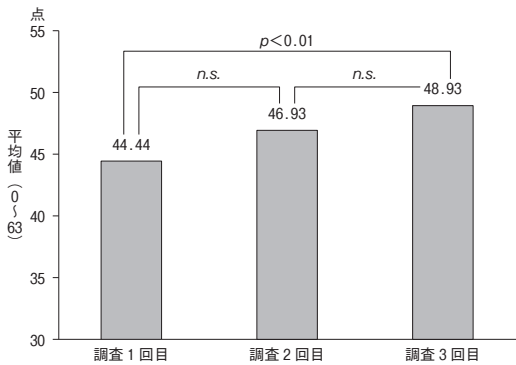
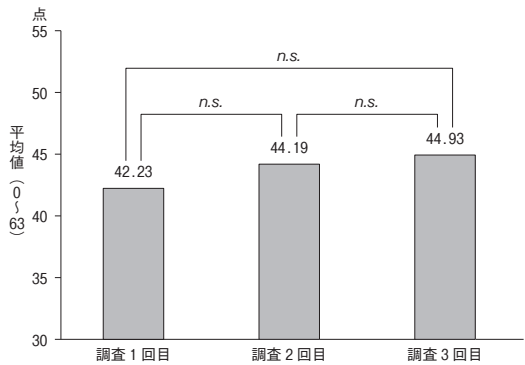


表3-b 3施設の生活安心感得点の経年的変化

	調査1回目	調査2回目	調査3回目
A	40.31	41.82	42.64
B	44.23	46.07	47.69
C	41.86	44.29	44.45
3施設平均値	42.23	44.19	44.93

図1-b 3施設全体の生活安心感平均値の経年的変化



(2) 児童養護施設版「生活安全感・安心感尺度」(SCSSS) 得点の経年的変化

1) 生活安全感得点の平均値の経年的変化 (表3-a, 図1-a)

施設ごとの変化をみると、A施設が調査2回目と調査3回目の間の得点の伸びはみられなかったものの、調査1回目よりは高い得点であった。施設B、Cは年々得点の上昇がみられるなど、回を重ねるごとに施設内の生活安全感得点は高くなっていった。次に、3施設全体の生活安全感の平均値の経年的変化を比較した結果、調査1回目の平均値44.44点と調査3回目の平均値48.93点の間には有意差 ( $P < 0.01$ ) が認められるなど、回を重ねることによって生活安全感得点は高くなった。

また、調査2回目と調査3回目の連結匿名142名を対象に行った対応のあるt検定では、調査2回目の平均値が46.51点、調査3回目が48.92点と有意差 ( $P < 0.05$ ) があり、施設全体でも、個人を単位とした場合でも得点が高くなっていった。

2) 生活安心感得点の平均値の経年的変化 (表3-b, 図1-b)

施設ごとの変化をみると、3施設すべてにお

いて得点の上昇がみられるなど、生活安全感と同様に、回を重ねるごとに施設内での生活安心感得点は高くなっていった。次に、3施設全体の生活安心感の平均値の経年的変化を比較した結果、回を追うごとに緩やかな伸びはみられるものの、有意差は認められなかった。

また、調査2回目と調査3回目の連結匿名142名を対象に行った対応のあるt検定では、調査2回目の平均値が44.75点、調査3回目が44.83点と有意差は認められなかった。

(3) SCSSS活用に関する子どもの意見調査 (表4)

設問1の「この1年間をふりかえて、このアンケートは、みなさんが、施設の中で安全で安心して生活できることに役立ったと感じましたか」では、「とてもそう感じる」67名(42.7%)、「少しそう感じる」43名(27.4%)、「どちらとも言えない」28名(17.8%)、「あまりそう感じない」9名(5.7%)、「全く感じない」10名(6.4%)と、約7割弱の子どもが役立ったと感じていた。

設問2の「このアンケートを続けることで、みなさんが、施設の中で、安全で安心して生活

できることに役立つと思いますか」では、「とてもそう思う」74名(47.1%),「少しそう思う」42名(26.7%),「どちらとも言えない」24名(15.3%),「あまりそう思わない」7名(4.5%),「全く思わない」10名(6.4%)と、約7割強が役立つと答えていた。

(4) SCSSS活用に関する子どもの自由記述 (表5)

意味のまとまりを1つの記述とみなし集計したところ、合計155の記述(13の重複あり)が書かれていた。その中で一番多かったのは、ア

ンケートに関する肯定的な感想で、具体的には、「このアンケートをすることで普段口では話せないようなことでも素直に答えられた」「これからのこのアンケートをやっていけば、自分の中の不安や悩みが少しは和らぐと思う」などであった。その一方、「量が多い、長い」などと、アンケートへの否定的感想もあった。

次に多かったのは、生活や自己への振り返りの内容であり、具体的には、「自分の今までの生活を振り返ることができたので良かった」「自分を見直すことができた」と答えるなど、生活ならびに自己への振り返りや生活の改善に

表4 SCSSS活用に関する子どもの意識調査 (N=157)

(単位 名, ( ) 内%)

効果に関する質問項目	とてもそう感じる	少しそう感じる	どちらとも言えない	あまりそう感じない	全く感じない
質問1 この1年間をふりかえて、このアンケートは、みなさんが、施設の中で安全で安心して生活することに役立つと感じましたか	67(42.7)	43(27.4)	28(17.8)	9(5.7)	10(6.4)
	とてもそう思う	少しそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全く思わない
質問2 このアンケートを続けることで、みなさんが、施設の中で、安全で安心して生活することに役立つと思いますか	74(47.1)	42(26.7)	24(15.3)	7(4.5)	10(6.4)

表5 SCSSS活用に関する子どもの自由記述のカテゴリー分類 (3回の調査) (N=155)

カテゴリー	カテゴリー数(%)	サブカテゴリー数(%)	具体的内容の概要(内数)
アンケートに関する感想	74(47.7)	肯定的な感想 43(27.7)	楽しかった(9)、うれしかった(2)、面白かった(1)、有意義(1)、良い・わかりやすいアンケート(6)、気楽・正直・素直に書ける・答えやすい(4)、役立つ(3)、またやりたい(4)、感謝(9)、頑張った(3)、もっと良くなりしたい(1)
		否定的な感想 ならびに要望 31(20.0)	量が多い(8)、同じ質問がある(3)、長い(8)、大変(1)、難しい・めんどい(5)、疲れた(1)、学校でもあったアンケートがあった(1)、要望だけのアンケートをやりたい(1)、わかりやすい言葉を使って欲しい(1)、文字が小さい(1)、やっても無駄(1)
生活や自己への振り返り	35(22.6)	生活への振り返り 11(7.1)	生活への振り返りができた(6)、生活が楽しい・大切な家(5)
		自分への振り返り 24(15.5)	自己への振り返りができた(7)、自己の改善意欲(10)、幸福感(2)、自己の傾向への理解(1)、暴力防止への学習効果(4)
職員・施設に関する内容	19(12.3)	-	職員への感謝(4)、職員への不満(9)、環境改善要望(6)
抑圧された感情・思いの解放・解消	9(5.8)	-	すっきりした(5)、自分の気持ちが書けて・言えて良かった、ほっとした(4)
感情吐露	8(5.2)	-	さみしい(4)、イライラ・ストレス(3)、秘密の開示(1)
願望・要望	2(1.3)	-	サッカーしたい(1)、○○君みたいになりたいかった(1)
学校への不満	1(0.6)	-	学校で嫌なことが多い(1)
無関係	7(4.5)	-	

注 重複項目あり

向けての意識付けになっていたことがわかった。また、「将来、自分が大人になった時、今日、やった事を生かし、暴力を振るわないようにしたい。そのために勉強して良かった」「気軽にしていることといけないことの区別がついた」と、SCSSSの調査が暴力の防止への刺激になったと推測できる内容もみられた。

3番目に多かったのは、職員や施設に関する内容で、具体的には「私の面倒をよくみてくれるのでうれしい」と、職員への感謝が述べられている一方で、「職員は差別している」「機嫌を子ども達の前で出さないで…」と、職員に対する不満や、施設環境に対して「いじめがないこと」「施設をより良い生活環境にして下さい」と、生活環境の改善の要望もみられた。

4、5番目に多かったのは、抑圧された感情・思いの解放・解消や感情吐露であった。具体的には、「自分の思っていたことを出せたのですっきりしました」「自分の気持ちが素直に書けるからいい」など、普段言えないことが調査を通じて表出できたことが書かれていた。

## Ⅳ 考 察

### (1) 仮説について

児童養護施設で暮らす子どもが感じている安全感・安心感を数量化したデータはこれまでの研究にはなく、今回、SCSSSを活用することによって子どもの感じている安全感・安心感の把握が数量的に可能となった。生活安全感・安心感得点は、両方とも回数を重ねることによって、入退所により子どもが一部入れ替わった集団の水準でも、同一の個人の追跡をみても上昇がみられた。また、子どもの意見調査や自由記述からも、SCSSSという媒体を使って調査を行うことによって、子どもの内省が促進されたり、安全感や安心感を高める可能性が示唆されるなど仮説は支持された。

SCSSS得点の変化では、生活安全感得点が、有意差な上昇がみられた一方、生活安心感得点の上昇には有意差は認められなかった。その理由は、生活安全感の質問項目は、身体的・心理

的暴力、いじめ、無視など具体的事象について測定していることから、子どものSCSSSへの反応性が高かったからではないかと考えられる。つまり、これらの事象は、子どもの日常生活において気付かれ、意識に残りやすく反応に直結しやすいのではないかと考えられる。その間接的な証拠として、自由記述の中で、「暴力を振るわないようにしたいです」などと暴力の防止の学習効果が得られたと推測できる内容が4件(2.6%)書かれていた。このように、安全感や安心感に対する教育的効果が子どもに生じ、得点への上昇につながったのではないかと考えられる。一方、生活安心感は、得点の伸びが緩やかで有意差を持った変化はみられなかった。これは、入所している子どもは虐待を受けた子どもが多く、その被虐待体験から不安感を抱きやすく、他者との信頼関係も築きにくいことが関係しているのではないかと考えられる。そのため、生活安心感が高まるためには、長い時間がかかることが予測される。しかし、あくまでも仮説の段階であり、今後、長期的に追跡していくことが課題である。

### (2) SCSSSを活用した安全感・安心感の改善の可能性の評価について

SCSSSを活用の可能性に一定の有用性が認められた。このことは、毎年施設内で定期的にSCSSSを活用してチェックすることによって、安全で安心した環境作りに役立つと考えられる。

田嶋<sup>4)12)13)</sup>は、施設内に起こる暴力行為の対策として、安全委員会方式を提案している。学校、児童相談所、施設長、研究者からなる委員会を外部に設置し、その委員会が聞き取りなど施設内に介入的な試みを行い、一定の効果を得ている。しかし、職員の入れ替わりによる継続性の問題や、施設側の協力体制の問題などを課題として挙げている。野津<sup>14)</sup>や永井<sup>15)</sup>は、安全で安心した施設環境作りのために、入所する子どもに対する人権教育や職員の人権擁護の視点の習得、援助技術の向上などの必要性を述べている。また、星野<sup>16)</sup>は、施設内で行われているケアが適切かどうかを、常にモニタリングしな

がらケアの質の向上を目指すモニタリングシステムの構築の必要性を述べている。その意味においては、今回のSCSSSの活用の試みは、施設の職員自らが、安全感・安心感を自己点検（セルフモニタリング）し、自らの意識改革をする助けになるであろうし、職員や子どもの入れ替わりがあっても、安全・安心を維持するシステムのひとつとして機能するのに役立つと考えられる。

### （3）今後の課題

今回、SCSSSの繰り返しの活用は、子どもの安全感・安心感を高めるのに有効であった。しかし、調査を行う介入だけでは子どもの安全の確保は不十分である。今後の課題としては、調査でアセスメントした結果を基に、子どもに対しては、他者とより良い人間関係を築いたり、怒りや攻撃心などの感情をコントロールしたりするためのソーシャルスキルトレーニング、過去の体験や境遇に対する被害的・悲観的な認知傾向の修正を促す認知行動療法的アプローチなど、子どもが安全で安心して生活し、自立に向けて前向きに取り組めるプログラムの開発が必要であると考えられる。一方、職員に対しては、より施設内環境の改善のためにSCSSSに関する職員研修を行ったり、SCSSSを活用した事例検討を促したり、より良い環境作りのためのシステムを構築していくことが課題であるといえる。

### 謝辞

本研究にご協力下さいました児童養護施設に入所中の子ども達ならびに職員の皆様に深く感謝申し上げます。また、今回の研究をまとめるにあたり、多くのご示唆とご指導を下さいました国際医療福祉大学小田原保健医療学部看護学科荒木田美香子教授には、心から深く感謝を申し上げます。なお、本研究では報告すべき利益相反はなく、2013年～2016年文部科学省科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究（課題番号25590139）の一部として行われた。

### 文 献

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局. 児童養護施設入所児童等調査結果の概要（平成25年2月1日現在）. (<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11905000-Koyoukintoujidoukateikyoku-ku-Kateifukushika/0000071183.pdf>) 2018.5.1.
- 2) 市川和彦. 施設内虐待－なぜ援助者が虐待に走るのか. 東京：誠心書房, 2000；26-104.
- 3) 市川和彦. 続施設内虐待－克服への新たな挑戦. 東京：誠心書房, 2002；1-103.
- 4) 田嶋誠一. 児童福祉施設における暴力問題の理解と対応 続・現実介入しつづつ心に関わる. 東京：金剛出版, 2011；79-190.
- 5) 厚生労働省. 被措置児童等虐待対応ガイドライン. ([http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki\\_yougo/dl/yougo04-01.pdf](http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/syakaiteki_yougo/dl/yougo04-01.pdf)) 2018.10.28.
- 6) 厚生労働省. 平成25年度における被措置児童等虐待への各都道府県市の対応状況について. ([http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/00000\\_80222.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/00000_80222.pdf)) 2018.10.28.
- 7) 松村香, 鈴木寛, 加藤健志, 他. 児童養護施設における『生活安全感・安心感尺度』作成の予備的研究. 子ども家庭福祉学 2014；14：47-56.
- 8) 松村香, 宇津木孝正, 岡隆. 児童養護施設で暮らす子どもの生活安全感・安心感と精神的健康感との関係－「生活安全感・安心感尺度」の改良を通して－. 日本大学文学部人文科学研究紀要 2017；94：47-62.
- 9) Fred N. Kerlinger. Foundations of Behavioral Research, 2nd ed. New York, 1973.
- 10) E・アロンソン, 岡隆〔訳〕. ザ・ソーシャル・マニュアル【第11版】人と世界を読み解く社会心理学への招待. 東京：サイエンス社, 2014.
- 11) A.H.マズロー, 小口忠彦〔訳〕. 人間性の心理学. 東京：産業能率大学出版部, 2013.
- 12) 田嶋誠一. 児童福祉法改正と施設内虐待の行方－このままでは覆い隠されてしまう危惧をめぐって. 社会的養護とファミリーホーム 2014；5：12-24.
- 13) 田嶋誠一. 非行問題における暴力への対応の重要性－「安全委員会方式」の実践から. 児童心理 2014；68(9)：117-24.
- 14) 野津牧. 児童福祉施設内虐待の現状と課題. 名古屋短期大学研究紀要 2016；54：113-21.
- 15) 永井亮. 人権回復の場としての児童養護施設の課題－施設を子どもたちの人権回復の場として定着させるために. ルーテル学院大学研究紀要 2007；41：67-80.
- 16) 星野崇啓. 施設内虐待後の再建と予防. 子どもの虐待とネグレクト 2009；11(2)：182-93.